

キャラクター名

鯨鯨 薊(けいげい あざみ)

プレイヤー名

シンドローム	ソラリス		ワークス	UGN支部長A	カヴァー	小学生
	オルクス					
オブショナル			年齢	12	性別	女
覚醒	忘却	衝動	妄想		初期侵食率	31%
出自	犯罪者の子	経験	裏切られた		邂逅	友人

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	24
肉体	0	1	0			1	行動値	4
感覚	1	0	0			1	(非装備時)	4
精神	2	0	0			2	戦闘移動	9
社会	5	0	0			5	全力移動	18

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	1		射撃			R C			交渉		
回避	1		知覚			意志			調達	1	
運転：	2		芸術：			知識：			情報：UGN	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品		合計装甲：	0	合計回避：	0
		ロイス			
		対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス消費
		ファイアスターター	P 好奇心	N 脅威	
		敷島あやめ	P	N	
		戦闘用人格	P	N	
			P	N	
			P	N	
			P	N	
			P	N	
		最大財産P: 12 残り財産P:			

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
コンセントレイト：ソラリス	1	2	メジャー					
効果：C値-Lv 下限7								
扇動の香り	5	5	セットアップ	視界	単体	自動		
効果：対象攻撃時判定ダイス+Lv								
絶対の恐怖	5	3	メジャー	視界		対決		
効果：攻撃+Lv 装甲無視								
領域調整	3	2	メジャー/リアクション	至近	範囲(選択)			
効果：ダイス+Lv個								
神の御言葉	5	4	メジャー			対決	リミット	
効果：攻撃+Lv*5 シナリオ3回								
要の陣形	2	3	メジャー		三体			
効果：対象を三体に変更 シナリオLv回								
オーバードーズ	1	4	メジャー/リアクション				100%	
効果：全エフェクトLv+2 シナリオLv回								
	★							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

・下を読みたくない人用
小学生にして1支部の支部長を動め上げる天才児。能力こそ確かな物ではあるが、その能力と、そして何よりも性格、内面的に大きな問題を抱えているために、支部長から出世できるか定かではない。学校に行くことと虐められるため不登校児である。
両親が犯罪者であり、虐めの原因となっている。トラウマから二重人格に近い状態に陥っており、戦闘時はストレスから言動が切り替わる。

・長い方
裕福な家、暖かい家族。良き隣人。おおよそ望み得る理想に近い環境で生まれた薊は、絵に描いたように純粋な箱入り娘として育ってきた。世間体を気にした両親は薊に大人にも通用するレベルの礼儀作法を徹底的に叩き込んでいたが、それすらも本人達にとっては暖かい思い出の1ページに過ぎない。両親の期待に応え続けた薊は周囲から天才児と持て囃された。
少し教育が厳しいが、それは子が優秀だからであり、その他は至って普通の家庭。それが客観的に見た薊の実家の評価だ。
しかし、それも小学校2年生までの話だった。

薊が七歳の頃に、両親が捕まる。罪状は死体遺棄だという。山奥に二人で死体を埋めたという事らしい。薊の両親は最後まで無実を訴え続けたが、薊自身真偽は分からなかった。そして、真偽よりも大きな問題が存在していた。
それ以降犯罪者一家の娘とされて薊は虐められ続けた。本人が覚えている限りで少なくとも、2年間の間は。
同級生は勿論、下校班が一緒の上級生や、担任の先生。授業参観など出席しようものならPTAなどにも当然のように嫌がらせを受けたのだ。
同級生たちは無垢すぎる感性から親の発言を真に受け、薊を絶対悪だと信じ切っているし、大人である筈の先生ですら薊には冷たい目を向ける。何もしないどころか、いるだけで薊だけが罰を受けた。保護者達など目の前で陰口を叩くなどはまだいい方で、体格の違いを良い事にぶつかったフリをして階段から突き落としてきた事もある。
薊の周りでは、持ち物はすぐに消えた。誰かが持ち去り、捨てるから。薊は新しい服は着れなかった。着ていけば誰かがハサミを取り出し切り刻む。薊は言葉は発せなかった。どうせ誰もその雑音には耳を貸さないのだから。薊の面倒を見るために越してきた親戚も、最低限の世話をするものの干渉は一切しない。その時の薊には、おおよそ安住の地と言える場所は無くなっていた。